



キャンプ・アブバカルの村で料理をする女性たち

Bangsamoro 報告

<第11話>

ミンダナオ平和構築支援の現場から

中坪 央暁

(国際開発ジャーナル社編集委員)

Normalization

ミンダナオ包括和平合意の最も重要な要素のひとつが、モロ・イスラム解放戦線 (MILF) の軍事部門「バンサモロ・イスラム軍」(BIAF)の武装解除、そして“ムジャヒディン”(イスラム聖戦士)と呼ばれる兵士たちの社会復帰である。和平合意の付帯文書“Normalization”(正常化)に基づき、2015年6月にアキノ大統領、ムラドMILF議長の出席の下、儀礼的な「武器引き渡し・兵士退役式典」がバンサモロの中心都市コタバト北郊で開かれ、武装解除プロセスが曲がりなりにも動き出したことは先にお伝えした(本誌8月号)。この式典では中高年層のイスラム兵士145人が退役し、見返りとしてフィリピン政府から公的な健康保険の加入、生活支援一時金2万5,000ペソ

(約6万8,000円)などが支給された。

MILF兵士は1万数千人とも3~4万人とも言われ、実態はよく分からないが、政府とMILFの和平交渉団に直属する「合同正常化委員会」(JNC)関係者によると、そのうち「フルタイムの正規戦闘員は2割、ふだんは農業をしながら招集があれば武器をとる農民兵が4割、登録だけの予備役が2割、残り2割は戦闘員ではなく資金や物資調達などの協力者」。第1陣の退役145人は、MILF指導部が「フルタイムの戦闘員であること、勇敢に戦った戦歴を持つこと、そして特に貧しいこと」を条件にリストアップしたという。

退役兵士たちは和平プロセス、そして自らの境遇をどう受け止めているのか。MILFが2000年ま



MILF兵士として40年来戦って来たハロン・パンダオ夫婦と末娘



元MILF中隊長のナスルディン・タンゴ

で本拠地としていたマギンダナオ州のキャンプ・アブバカルの中核に位置するバリラ町の村々に彼らを訪ねた。以下はその証言である。

■ハロン・パンダオ (59歳)

＝元MILF地区作戦担当、マダリン集落

モロ民族解放戦線 (MNLF=MILFの前身) に加わったのは16歳の時だった。1970年代のマルコス政権による弾圧はすさまじく、家々やモスク、学校が焼かれ、多くの村人が殺された。私たちは山中を転々としながら戦い、キャッサバやバナナを食べて生き延びた。8歳年下の妻は医療部隊にいて、2000年の“全面戦争”では子どもたちを両親に預けて、私は最前線で戦い、妻も治療用具を持って戦場を駆け回った。最後はアブバカルを奪われてしまったが…。しばらくして村に戻り、小屋を建て、畑を耕して生活を立て直したが、無理がたたって長男が病死してしまった。貧しくて病院にも連れて行けず、未だに悔やんでいる。

今は2男8女がいて、年長の子たちは独立したが、末娘は近くの小学校に通っている。ココナツやトウモロコシ、コメを作って、年数回の収穫時には1万ペソ (約2万7,000円) 以上の現金収入があるが、借金返済で手元に残らない時もある。退役して一時金とコメ1袋をもらったが、家を建て

替えてくれる約束は果たされていない。良くなったことは何もなく、ずっと貧乏なままだ。

戦争はもうこりごりだ。振り返ってみると、戦いの勝者などおらず、誰もが不幸な目に遭っただけだと思う。戦闘が終わっても、土地争いなどのトラブルが後を絶たず、不正や腐敗がまかり通っている。早く平等で公平な世の中になり、バンサモロが発展することを望んでいる。

■ナスルディン・タンゴ (69歳)

＝元MILF中隊長、マラン集落

子どもの頃から貧しくて、小学校にも満足に通えず、マドラサ (イスラム神学校) で読み書きを習った。1972年にMNLFの「黒シャツ隊」に加わり、MILFでは小隊長、中隊長として40年間戦ってきた。私は指揮官としてほとんど前線にいて、いつ家族に会えるか分からず、明日にも戦死するかも知れない日々だった。妻が女手ひとつで子育てしながら畑を耕し、農作物を市場で売って生計を立ててくれた。2男5女に恵まれ、良い仕事に就けるように高校や大学に進ませたかったが、貧しくて実現してやれなかった。私自身、この歳まで戦う以外に何もしたことがない。

私たちの戦いの目的は、バンサモロの自由を守り、アッラーの大義を実現することに他ならない。

退役式典の時は、こうして引退することに満足感を覚えたが、家を建て替え、ビジネスを始める元手を支給されるはずが、その後何も受け取っていない。どうなっているのだろうか？ それでも、とにかく紛争が終わった今は、昔と比べれば大違いだと思う。2度と戦いに戻ってはいけない。子どもたちや次の世代にとって、将来がより良いものになってほしい。バンサモロ政府ができて、本当の平和が訪れることだけを祈っている。

私も妻も歳なので今さら農作業はできない。同居する息子たちがトウモロコシやキャッサバ、陸稲を育てている。家を見に来たいって？ 難しいな、山の中だからね。車が通れる道もないので、ふもとから馬で小1時間かかる。もちろん電気も水道もない。暮らしは昔も今も変わらない。

■ サリック・カサン (45歳)

＝元MILF兵士、トゥガイ集落

15歳でMILFに参加し、初めて政府軍と戦ったのは1988年のことだ。攻撃がある度に家族を避難させて応戦し、2000年にキャンプ・アブバカルが陥落した時は、幼い子どもたちを連れて北のラナオ地方まで徒歩で逃れた。数年経って「ガワッド・カリंगा」(NGO)が帰還者用に建てた今の家に住むようになった。ソーラー発電の電気があって、向こうに共同井戸もある。子どもは3男4女で、すぐ近くの小中学校に通っている。少し離れた農地でトウモロコシやバナナ、野菜を育て、だいたい4カ月に1度、7,000ペソ(約1万9,000円)ほどの現金収入があるが、もちろん充分ではなく、うまくいく時もあれば不作の時もある。

退役145人の中では若い方で、新しい生活に向けて、子どもたちの教育や生活への支援があると聞いていたが、最初の一時金を受け取って、それっきりだ。政府との合意通り和平プロセスが進み、退役兵士への支援の約束を果たしてほしい。私たちのような経験を子どもたちにさせてはならず、より良い未来が来ることを願っている。

* 妻のアパオ・イガウ (45歳)

夫は紛争中、ずっと留守にしている、ひとりで子ども7人を育てながら畑仕事をするのは、並大抵のことではなかった。今も他の農家の収穫の手伝いに行くが、トウモロコシ1袋詰めて20ペソ、1日5袋として100ペソ(約270円)、それでコメ2キロを買う。生活は本当に苦しい。



退役兵士のごく一部の声ではあるが、イスラムの大義のために長年戦いながら、得たものは余りに少なく、目先の話では家の建て替え、ビジネス資金などの支給がないことに一様に不満を抱いている。この件は政府とMILFが生活支援策として検討している段階なのだが、彼らは確約されたものと思込んでいる。また、話すうちに興奮して涙ぐんだり、逆にサバサバ達観したりと、これは個々人の経験や気質にもよるのだろう。他方で「悲惨な紛争を繰り返してはならない。子どもたちは平和なバンサモロで幸せに暮らしてほしい」という思いを、建前ではない心の底からの本音として異口同音に語っていることは、マギンダナオ語であるにも関わらず不思議に理解できた。

もっとも、MILFを仮に1万5,000人と少なめに見積もっても、145人は全体の1%未満、フルタイム戦闘員の5%未満に過ぎない。和平プロセスが合意通り進めば、30%を武装解除する第2段階を



MILF退役兵士のサリック・カサン夫婦

経て、最終段階で全面武装解除・総員退役となるのだが、大前提であるバンサモロ基本法（BBL）の国会審議が大幅に遅れる中、第1陣145人の退役だけでもMILF側にとって「苦渋の決断だった」と言われる。あるMILF幹部は「ミンダナオには不法な銃器が無数に流通している。政府軍だけでなく、他の武装勢力がこの地域に存在する状況で、われわれだけが先に武器を手放すのは非常に難しい」と述べたが、誠にもっともな理屈である。



貧しいイスラム教徒が多く住む川沿いの家々(コタバト市内)

また、地域の治安維持を担うバンサモロ警察は、フィリピン国家警察の一部として創設されることになっており、その主力は現職警察官だが、へき地などに配置されるコミュニティ警察の準警察官として、MILF退役兵士が採用される可能性は残されている。とはいえ、大多数のムジャヒディンは「銃を鋤に持ち替えて」農業に専念するか、村でサリサリ（雑貨屋）を営むような静かな暮らしに納まっていくのだろう。



“Rido”なるものについて触れておきたい。ミンダナオに対する偏見を助長する気は毛頭ないが、当地では一皮むけば、圧倒的な暴力が支配する精神風土が21世紀の今日も払しょくされていない。Ridoとは、氏族（クラン）同士の政治的確執や土地争いといった伝統的・土着的な紛争のことで、これにさまざまな武装・犯罪集団が絡んで複雑化し、私的ないさかいが集団同士の衝突に拡大してしまうこともある。加えて、野放し状態の銃器が殺人などの凶悪犯罪が相次ぐ背景にある。

極端な事例だが、2009年11月、マギンダナオ州知事選挙の候補者陣営と同行記者団が武装集団に襲われ、57人が殺害されたうえ、重機で掘った穴に車ごと埋められるという前代未聞の大虐殺事件があった。対立する地元有力政治家の私兵による犯行とされ、一族から逮捕者が出たほか、地元警察や軍の関与も疑われたが、未だにひとりも有罪判決を受けていないばかりか、逆に裁判の証人や

家族が殺される事件まで起きている。

国際監視団（IMT）の経験があり、当地の情勢に詳しいコタバトのJICAプロジェクト事務所総括、落合直之によると「ミンダナオの紛争は3層構造になっていて非常に根が深い」。具体的には、第1層＝政府 vs MILF（民族自決、土地・資源の争い）、第2層＝氏族・移住者・先住民族の対立（利権・土地・資源の争い）、第3層＝テロ組織・犯罪集団の活動（カネ目的）が重層的に存在し、しかも各層が明確に分かれるのではなく、確執や利害関係がもつれ合っている。包括和平合意に基づく和平プロセスは、主として第1層のことであり、イスラム教徒だけでなく地域全体を包摂するバンサモロ政府が設立されたとしても、政治的・社会的な不公正の是正、資源収入の公平な分配、産業振興や雇用創出を通じた貧困削減が図られなければ、本質的な意味で紛争解決にはならない。さらには、それで第2層・第3層まで自動的に解消されるわけではない。最近も地元マフィアとイスラム過激派アブ・サヤフの連携をうかがわせる外国人誘拐が発生するなど、和平合意の陰で治安上の懸念は依然として残っている。

「紛争影響地域の人々が安心して平和に暮らせる社会をつくる」という平和構築・開発協力の取り組みの足元に、底知れない闇が広がっていることを、バンサモロでは常に意識しなければならないようだ。
*文中敬称略（つづく）